

平成 16 年 1 月 30 日

平成 14 年度 静岡文化芸術大学 学長特別研究費 研究成果報告書

(研究テーマ：コミュニケーション・デザインからみた都市、芸術・文化のあり方に関する研究(2))

静岡文化芸術大学 文化政策学部文化政策学科 阿蘇裕矢
〃 〃 芸術文化学科 谷川真美

1. 研究の目的

本研究は、昨年度の研究テーマ「コミュニケーション・デザインからみた都市、芸術・文化のあり方に関する研究」の(2)である。

当初の研究計画では、講師であるジェラルド・キャロン氏の著書、言論などの分析、コミュニケーション・デザインの考え方の整理を中心としてまとめることであった。しかしながら、研究課題として学生への教育的な効果の分析が必要であることから、本年度の研究は、主として氏の講義に関する学生の評価・理解について把握することとした。

2. 研究の評価

「デザインと都市生活」のテーマについては阿蘇が担当し、「芸術と文化」については、谷川が担当した。

ジェラルド・キャロン氏の講義は、『豊かな感性』『創造力』をもった人材の育成という教育プログラムの一環となったと評価できる。その根拠として、「デザインと都市生活」のテーマについては、学生の感想文から抽出した意見をまとめることで評価する。

特に、本学の教育理念でもある「地域と世界の双方に目を向け、足を一步踏み出しながら、美意識と実行力を兼ね備えて時代を乗り切っていく人材の養成」という命題に対して、ジェラルド・キャロン氏の講義は、内容、プレゼンテーションともに多くの感銘を与えたと考える。「芸術と文化」については、講評というかたちで最後に記述している。

「デザインと都市生活」において収集した学生の感想は、おおむね以下の意見に集約できる。

- ・ 客観的な都市の見方を学んだ
- ・ 視覚に訴えるプレゼンテーションの効果
- ・ 東西の物の見方や空間の捉え方
- ・ 都市における人間の欲求の存在
- ・ ヨーロッパと日本の町並みの比較
- ・ 文化の違いから生まれるデザインの相違
- ・ デザインの果てしない可能性について
- ・ デザインの背景にある精神性の相違
- ・ デザインは誰のために行われるのか
- ・ 都市におけるデザインの果たす役割（都会人の求めるデザインとは何か）
- ・ 都市のグローバル化が思った以上に進んでいることを知った

特に都市におけるデザインの果たす役割（重要性、都市とデザインの関係性、コミュニケーションの円滑化など）については、「都市に住んでいる人に夢を与え、都会のストレスをなくすこと」、さらに「都市におけるデザインは、都市に存在しない“自然”の代わりでもある」という主張にも共感する声が多かった。

わかりやすい、身近な事象を挙げながら都市の見方を解説したことは、「都市」を身近なものとして理解する手助けとなった。

国際文化学科の学生の意見として「デザインに興味を持っていたが、デザインとは外見の問題でどのくらい見栄えがよいか、かっこいいかの問題だと思っていました」(国際、0211009 伊藤大介)、「都市をデザインという視点で見ることは、ただ都市の機能だけを重視するものではなく、そこで暮らす人々の思いや精神面などさまざまな面で捉えていくことを学んだ」(国際、0211014 梅谷佳代)、「デザインに対する考え方が変わりました。デザインとは、デザイナーの人の感性だけでつくられていると思っていました」(国際、0211069 中澤紗枝子)、「デザインになんの興味も知識もなかった私にもわかるような、理解しやすい講義であった」(国際、0211017 大石彩香)といった意見である。必ずしもデザインの教育を受けていない学生にとっても多くの示唆を与えたようであり、デザインの概念、デザインの意義、効果などについて多くの知識を得たようである。

一方、文化政策学科の学生では、「講義を通して、今までとは違った視点で都市をみるようになった。街を歩いているだけでもデザインというものを意識してものを見ることが多くなった。この講義は、デザインをより身近に感じさせてくれるきっかけになった」(文政、0212021 今野由美)、「生のフランス語に感動した。そして同時通訳の凄さに鳥肌が立った。自然を必要不可欠とする人間が自然の少ない『都会』に住み、デザインにそれを求めている、というくだりなどから、現在のアジアニストな物や、カントリー風なものが流行していることに納得した」(文政、0212028 鈴木昌絵)、「中学以来、デザインや美術全般に興味を持てずにいたが、都市に与えるデザインの影響がこれほど大きいとは思っても見ませんでした。これからは、都市におけるデザインの意味を考えていきたい」(文政、02121030 鈴木博昭)といった意見が多かった。

その他、芸術文化学科は、「生活に欠かせないものであるデザインに注目することが世界を知るすべになることに気づくことが出来ました」(芸文、0213003 天野真由美)、「外国人からの指摘で、はじめて日本の文化について触発された」、デザイン学部の学生からは、「自らのデザインに大変役に立つ講義であった、よりいっそうデザインに対する関心が高まった」、といった意見が寄せられた。パワーポイントでの美しい映像のプレゼンテーションは、両学部の学生に好感を得たようだ。

このうち、空間造形の学生から「まだデザイナーとしての基礎すら知らない私にとって、現一流のデザイナーとして活躍しているキャロン氏の話の聞けることは、今後の自分の活動においてとても参考になります」(空間、0123026 平岩伸悟)という感想に代表されるように、第一線の現場で捉えた氏の眼は、デザインのみならず、発想の原点にある文化性、とりわけフランス人の眼からみた都市や芸術・文化の捉え方は、学生に大いに刺激を与えた。学ぶこと、体験することへの意欲をかき立てたといえる。

また、「これから自分の国で何かをやるにしても、ますます世界的な視野で物事を見ていかなければいけないと思った。それは他の国おまねをすることではなく、他の国の良いと思うところや、考え方を取りいれながら、自分の国にそれを反映させ、調和させていくことである。また、何かをデザインするにしても、視覚的なことだけではなく、自分の国の文化や歴史、自然、人間の精神的なことなどにもバランスよく考えをおいていき、そのうえで新しいものを創り出し、人々の生活の意識そのものを向上させていかなければいけない、ということを感じた。」(空間、0123033 森あすみ)といった意見のように「世界的な視野」での講義に、学ぶことへの意欲をかき立てられたという意見は多かった。

3. 実施方法

「デザインと都市生活」では、あらかじめ指示した方法(件名の指定、送付のルールなどを講義中に文書にして伝達)により、メールを経由して236名の学生から感想を集めた。「芸術と文化」については、谷川が講評というかたちで取りまとめた。

4. 得られた成果

(1) 「デザインと都市生活」

今年度は、学生に対する感想文というかたちで意見を収集した。昨年同様、全員が積極的なプラスの評価をしていたこと、特にこれまでに「都市」や「デザイン」といったことを考えたり、興味を持ったことのなかった学生（国際文化学科に多い）に何らかのインパクトを与えたことは大きな成果である。「デザインについて誤解していた」「デザインはかたちだけかと思っていた」といった意見に代表される。

また、氏の経歴、フランス人でしかも現役で活躍していることなど、学生にとってはとても興味深い講義にうつったようである。ちなみに、昨年と同様に、フランス語を学びたくなった、フランスに行って勉強したいといった意見も多かった。地方都市の浜松にいながら世界の一流の人間と接し、学ぶというプログラムは大いに学生の勉強意欲をかき立てたと思われる。こうしたプログラムが実施されたことは大いに評価できるし、こうした試みを学生は期待していることがわかった。

次年度は、最終年次にあたることから、今回までの二カ年の実績を踏まえて、全聴講学生に対して定量的なアンケート調査を試み、より客観的なデータによって分析を試みたい。

(2) 「芸術と文化」

(後述、添付)

4. おわりに

昨年度に続いて開催されたジェラルド・キャロン氏の二つの講義は、昨年同様、好評のうちに終了した。パワーポイントを使った多数の美しい映像を駆使し、わかりやすく丁寧な解説は、学生の理解を高めるに十分であった。

しかしながら、当初に予定していた研究計画の内容を満たすことができなかった。この種の研究手法において、氏の主張する「コミュニケーション・デザイン」について分析することには、限界があることがわかった。むしろ学生の教育的な効果を一義的に考察すべきであった。

この研究は、次年度をもって終了するが、次年度においては、定量的な方法などを用いて教育的な効果やテーマに関わる事項などについて分析することを課題としたい。

本研究のおわりにあたって、平成14年度、静岡文化芸術大学学長特別研究費（種類：その他）の支援をいただいたことに感謝します。

(添付)

匿名性と有名性のあいだにある都市：キャロン氏の講義より

芸術文化学科 講師
谷川真美

都市と芸術のかかわりが顕著であると考えられるパリを考えると、この都市についての歴史的著作であるヴァルター・ベンヤミンの「パッサージュ論」を思い浮かずにはいられない。

19世紀的な都市から現代都市への移り変わりのなかでたち現れる「都市性」、とりわけ「都市的人間」の特性を探ることを試みたこの著作は、当然のことながらキャロン氏の連続講義の内容に通底するものを持っている。都市において人々がどのような存在となりうるか、そのような人間のありかたが、建造物よりなにより「都市」というものを形成する上で重要な要素となることが示唆されるからである。

このような「都市的人間」が形成されるような都市のありかたとはどのようなものか、芸術のありかたのうえでも特に現代的な取り組みで知られるパリでは、さまざまな美術作品が、精神性を備えたアゴラとしての公共広場の概念を基盤としてコミュニティを形成する上での重要な方法として存在する。このことは現在、人々の疎外感、孤独感を増幅させる都市の否定的特性を解消するものとして、きわめて有効な示唆を与えると考えられる。

近年の都市問題のひとつとして、都市の空洞化があげられる。都市の空洞化とは、単に物理的現象にとどまるものではなく、そこに暮らす人々の精神的な生活についても、多大な影響をおよぼす事象である。この問題はいわゆる「都市的性格」を有する日本の各都市においても近年顕著になっており、それは都市計画のなかでも単なるハードの問題を解決することのみで解消されるものではないだろう。

いっぽう芸術は、都市とのかかわりで語られることは少なかった。語られることがあるとしても、それは町にとっての「彩り」、つまり余剰物としてで、必ずしも都市を語る上での必要十分条件ではなかったのである。しかし、都市のありかたを考えるうえで、芸術の存在を過小なものとして評価することはできない。都市における人々の精神的つながりを語る上で、現在、芸術の存在がより重要なものと考えられるようになってきたといえる。このことは、美術館や文化施設の建設が都市計画にとって重要なファクターとなっているというような事実だけではない。たとえば上記の事項は、まさに最近、中国・北京の住宅開発地域に「文化的精神性」を付加するために、非営利施設として、住宅開発業者の手によって設立された遠洋現代美術センターの例が端的に示している。しかし、この例においても、単に施設を建てるのが目的なのではなく、その施設の中での活発な芸術活動こそが町に「精神性」を付加するのにほかならない。

都市の空洞化という問題に対する芸術の役割とは何だろうか。ことに都市生活が早くから発達したパリにおいて、その役割の本質的意味を探ることができるのではないかと考えられる。パリという都市のいわゆる「都市性」とでもいうべき性質を端的に分析しているのは、さきに触れたヴァルター・ベンヤミンの「パッサージュ論」である。ベンヤミンは、パリに登場したパッサージュという、建物の内と外の間、また歴史的には近代と現代の間という、物理的精神的ふたつの意味での「狭間」にある「曖昧」な、象徴的建造物をモチーフとして、そこを行き来する人間の特性を記述した。ここに記された人間こそ、「都市的人間」であり、その人間の持つ特性は、都市というものを形成する核である。彼らは、匿名的に、誰にも見とがめられることなく、町のなかを自由に動き回れる存在でなければいけない。しかしそれと同時に彼らは、町のなかで、自らの存在が他に認められるような心持が感じられなければならない。この一見矛盾するふたつの特性は、都市における人間の姿を明確に言い表したものである。

キャロン氏が「都市生活とデザイン」「フランスの芸術と文化の旅」のふたつの講義の中に示したパリの都市生活と現代人のかかわりかたは、ベンヤミンが述べた2つの事項「匿名性」と「有名性」を享受することができる稀有な都市の姿を浮かび上がらせ、きわめて興味深い講義であった。

自由に動き回れる匿名性と自己の充足を確認する有名性の二つは、ともに存在してこそ生き生きとした都市の姿を現す。前者は、いわゆる都市に相対する意味での田舎にはない。また、後者は、いわゆる「空洞化した都市」にはないといえる。逆に、人間がこれらの特性を示すよ

うな町において、生き生きした都市が成立することになるといえよう。

都市機能における芸術は、単なる都市計画における美的余剰物ではなく、都市そのものの機能を活性化させる、すなわちそこに住まう人々の精神をつなぎ、生き生きとしたものにするためのひとつの契機として提示される可能性があることを示しているといえることができる。芸術文化がまさに、人の匿名性と有名性を裏付け、生き生きと人がうごく都市を形作る重要なファクターとなっていることを、キャロン氏の講義は美しいプレゼンテーションとともに示してくれた。

講義に出席した学生の感想は「パリに行ってみたい」、「フランスは美しい」「フランス語での講義が新鮮だった」というやや稚拙なレベルに終始しているものも多く、講義を受ける我々の側にも準備の不足があったことは否めず、その点は悔やまれたが、それにしてもキャロン氏から受けたさまざまなインスピレーションが、折に触れ学生の豊かな発想に役立つことを願ってやまない。

「デザインが世界画一化」

静岡文芸大でキャロン氏

学生に特別講義

浜松

キャロン氏を囲んだ座談会。浜松市野口町の静岡文化芸術大学



フランスの旧通貨フランのデザインや、日本の自動車や銀行のブランドデザインを手掛けるジェラルド・キャロン氏（左）が十三日、浜松市の静岡文化芸術大学で特別講義と学生との座談会を開いた。キャロン氏は十五日まで同市に滞在して学生と交流を深める。十四日午前九時から十時半にも同大講堂で特別講義を行い、一般に公開する。

キャロン氏はフランス初のアート・デザイン・マーケティング会社「カレ・ノアール」を設立し、三年前に世界の流行を研究する「スコープ」社を立ち上げた。講義の中で東京やパリの若者、消費生活の共通点を例に挙げ「デザインが世界を画一化すると同時に、デザイン自体も各地域から影響を受けている」と相互の作用を意

識するように学生に呼び掛けた。座談会では学生二十人がキャロン氏を囲んだ。グラフィックデザインを学ぶ学生に対しては「デザインは見る人が何を感じるかで、むしろコミュニケーションに近い」と示唆を与えた。学生の将来の夢、建築や産業デザインなど、話題は多岐に及んだ。

2002.6.14
静岡新聞

だ。
文化政策学部三年の山田聡さん（左）は「将来は刺激と発想を得ることがデザインのコサルタン」を目標したい。キャロン氏との交流から多くの「できた」と話していた。

仏のデザイナーに
座談会で次々質問

静岡文化芸術大生

国際的に活躍するフランスのデザイナー・会社社長ジェラルド・キャロン氏（左）と静岡文化芸術大学の学生との座談会が十三日、浜松市野口町の同大学であった。

キャロン氏は、フランスフランのシンボルマークデザインや日本のさまざまな企業のシンボルマークやブランドデザインなどを手掛けており、デザインに興味や関心を持つ学生の参考にと招待した。座談会には、同大の一年生から三年生まで約二十人の学生が専攻にかかわらず参加し、キャロン氏に次々と質問した。キャロン氏は「デザインする者にとって大切なのは、技術ではなく豊富な情報と感性」と、学生たちの質問に通訳を介して答えていた。

2002.6.14
中日新聞